アンケート（1）　パラ応援大使の活動で、印象に残ったこと

【パラスポーツ観戦等】

- コロナ禍前でしたが、日本橋での「パラスポーツ体験イベント」に出席したことや、ウィルチェアーラグビーの観戦をしたこと
- 2019年10月パラスポーツ観戦会で、女子テニスの上地選手と大谷選手のテストマッチの観戦後、大谷選手のお話を伺ってパラリンピックへの関心をより深めた
- トライアスロン男子の視覚障害で銅メダルを獲得した米岡聡選手と大会前に伴走をさせてもらい、あまりの早さにびっくりした。その後、食事をし、私生活の話などを話しあった!!自分で料理を作る!!恋愛の話、本当に身近に感じた。大会前の不安、メダルを獲得した喜び、本当にうれしかった
- アスリート達の前向きな姿は私達に生き方を教えていただいた
- パラアスリートの方々といろいろな競技やイベントを共有し、その時に感じた驚異的な身体能力・五感の鋭さ、前向きな姿勢に衝撃を受けました。

【バリアフリー視察等】

- 新会場の完成披露式典に出席したこと。
- 東京アクアティクスセンターに取材に行かせていただいた時に、車椅子の方が付き添いの人と観戦しやすいような作りになっていたり、障害を持つ当事者の声が反映された会場作りが実際に行われていたことに感激した
- 実際に大会で使用する会場の視察をし、意見交換を行なったりしたことはとても興味深かった
- 2019年8月海の森上競技場の視察、ワークショップの成果を最初に現場で確認
- 2019年12月小池都知事、市川海老蔵さんとJR有楽町駅の改修視察、その後のボッチャ体験

【その他】

- 大会は残念ながら無観客でしたが、SNSで車椅子ユーザー目線レポートができた
- パラリンピックに対する興味が増えてきている事を実感。特に若い世代の方々の認知度が格段に上がった事が嬉しい。
- イベント等を通して多くの著名な方々と関わることができ、それを機に、今でも交流を続けることができていること。
- パラアスリートとの交流を持てたことと、運営や施設設備などについて都側より丁寧な説明をしていただいたこと
- 早合点した人から選手だと間違えられた
- 2020年1月15日の第3回懇談会は強く印象に残る。それぞれのメンバーが本音で議論した印象

アンケート（２）　東京2020パラ大会で、印象に残ったシーン

【競技関係】

○　全てのパラアスリートの勇姿

・ 全てのパラ・アスリートの勇姿が素晴らしかった。
・ ボッチャ日本代表メンバーの大活躍
・ 成田真由美選手（競泳）のチャレンジ
・ 木村敬一選手（競泳）の鍛え上げられた身体を目の当たりにしたこと
・ 車いすバスケットボール男子初のメダル獲得。歴史的瞬間を見ることができた
・ 車椅子バスケットボールにとにかく興奮しました。またTwitterのトレンド上にも鳥海選手の名前が頻繁に上がっていて、スター選手の出現をとても嬉しく思った
・ 車いすバスケットボール9月5日に行われた決勝戦。前回優勝のアメリカに最後の最後まで拮抗する戦いに時を忘れた。本当に日本人として大きな誇りをもらった!!素晴らしい試合でした
・ 女子テニスダブルスの上地選手と大谷選手の銅メダル獲得には、とても感動した。その他選手たちの姿をみるたびに、コロナ禍の中勇気と感動を戴いた
・ 車いすテニス国枝選手の金メダル奪還の決勝戦
絶対に勝つという気持ち溢れる試合や金メダル獲得後の涙はとても印象的だった
・ 陸上男子車いすの伊藤智也選手がクラス分けの変更にもかかわらず自己ベストで奮闘した
・ 馬術代表の宮地満英選手の競技後、奥様への「ありがとう！」、三浦浩選手の観客席への「ありがとう！」は、涙が出るほど感慨深かった。

○　さまざまな競技のアスリートの声が発信

・ さまざまな競技のアスリートの声を発信していたこと
・ 視覚障害のメダリストが「君が代を聞いて、初めて勝ったんだ！と実感しました。」のコメントに胸がつまった

○　その他

・ ダイナミックなラグビーの中に女性が入って競技されていたことにパラリンピックならではの素晴らしさを実感

【選手を支える方々】

・ 水泳の木村選手のタッパー・寺西さんの涙はじめ、陰で選手を支えるガイドやスタッフ、ボランティア、大会事務局の方々の頑張り
・ スタッフやボランティアなどたくさんの方々のサポートがあった事や、その皆さんが可能な範囲での精一杯のエールを選手に送っていた

【閉会式の演出に感銘など】

・ 閉会式の演出に感銘
・ 一つひとつの競技も感動の連続ではあったが、何と言ってもパラ閉会式。世界や地域を取り巻く様々な呪縛が取り払われた情景を体現していた。なぜこうした世界がもっと早く築けないのか、その理由は何か。私たちがどこに向かうべきなのかを改めて強く印象付けた。

アンケート（3）　後世に残したい、2020大会のレガシー

【パラスポーツ・バリアフリーへの関心拡大】

- 今回のパラリンピックでパラスポーツ、街のバリアフリー化に対して、一般の方々に認識を深めて戴けたと確信。更なる関心を社会の中で進め続けて戴きたい
- パラ開催前と比較し、パラの競技や選手のことを興味を持ってより深く知ってくださる方が増えたように感じる
- 大会を通じ、特にボッチャ等の知名度が上昇。さらに認知を広め、皆が一緒に楽しめる機会を増やし、施設精神両面でバリアフリーを推進したい。

【パラスポーツの振興など】

- 障害の有無に関わらず、パラスポーツに挑戦してみたいという声を耳にする機会が増えた。その気持ちに応えられる場を維持していきたい
- 私はコロナウイルスに罹患してしまい、会場には一切足を運べなかったのですが、たまたま母と電話で東京2020について話した時に、「今回は、とにかくパラリンピックが良かった。テレビでやってくれていたから観る事ができた。とても勇気づけられた」と言っていたのが印象的だった。試合の生中継が地上波で行なわれたことはレガシーである一方でネット中継もされなかった競技もあるので、どうにか、今後放送枠が増えて言って欲しいなと思う。
- 可能性は無限大であり、機会を創出することによってそれらが発揮されることが示された。このような動きを継続することが大切
- ハンディキャップをプラスに進化していく努力。私達の出来る事はアスリートの皆さんがどれだけ練習・試合をやりやすい環境を作ることだと本当に感じた。これからも応援していきたい。
- 色々な制限がある中でも大会を成功させる“工夫”。パラスポーツの精神そのものだったと思う。
- 大会を通じ、特にボッチャ等の知名度が上昇。さらに認知を広め、皆が一緒に楽しめる機会を増やし、施設精神両面でバリアフリーを推進したい。（再掲）

【バリアフリー、共生社会など】

- パラスポーツを知り、さらに選手や彼らを支える環境や社会を理解し、我々ひとり一人が共生社会の担い手であると意識する心
- 当たり前に障害者がまちに出て、買い物ができ、スポーツを楽しみ、働き、誰とでも普通に交わることのできる社会を築きたい
- クラス分けや能力別のポイントなどによって平等を追求する方法があることを国民が知ったこと
- 大会だけではなく普段の生活の中で健常者と共存し尊敬でき、お互いが必要をする社会の継続
- 短い時間でも共生社会の目標が作れること、真剣に立ち向かうこと
- 共生社会を実現する勇気と決断、その決断を先に延ばさないこと
- バリアはごく身近にあるが、だれかの責任にするのではなく、まず自分で行動すること